

# 新羅・元曉 Wŏn-hyo 論考

## 〈第一部〉元曉の半生涯

A. Study of Silla's Wŏn-hyo (Part 1) His Life of the first half.

菅 原 篤

### 序

韓国が生んだ世界的宗教家といえば、新羅仏教史上に輝く元曉≡Wŏn-hyo (六一七—六八六)の名が浮かぶ。かれは別名海東法師とも呼ばれ義湘≡Uisang (六二五—七〇一)とともに、朝鮮半島華嚴宗の開祖でもある。また七〜八世紀以降、かれはその著述を通して広く中国・日本にも影響を及ぼした学僧であった。(1)

『宋高僧伝』によればその出自について「姓は薛氏東海湘州の人」とあり、学問は「三学淹流し万人の敵と称せられた」。また行状については「或は疏を作り、或は雜華を講じ、或は琴を弾じ、或は山水に坐禅し、或は酒肆倡家に入つてその行動意に任せ、機に随い、少しも定儉なく俗人とかわらずいささか常人の域を脱していた」という。

本論ではかれの思想・宗教における業績を一応おいて、元曉の人間性の側面をさまざまな角度から考察したい。とりわけかれの人間味豊かな行状の中で、新羅文化の統合性・抱擁性を瞥見したい。

(1) 元曉資料について

元曉の行実には伝説につつまれた部分が多い。しかし近年韓国学界でも

著実に資料検討がはたされ、金石文解釈をはじめ多くの論考がなされている。

例えば『元曉論』閔泳珪・思想界八月号(ソウル)。『新羅人の菩薩戒思想』安啓賢・韓国哲学研究第一輯(ソウル)。『元曉の菩薩戒思想』李箕永・東国大学校論文集・第三などがある。

韓国伝来の元曉資料を当たってみると、凡そ次のようなものがある。

- (一) 『三国史記』卷四十六、「薛聡伝」(2)
- (二) 『三国遺事』卷四、「元曉不羈」(3)
- (三) 『高仙寺誓幢和上塔碑』(3)
- (四) 『和諍国師塔碑』(5)
- (四) 『新編諸宗教藏録』(6)
- また、中国・日本に伝わった元曉関係資料については、
- (六) 『宋高僧伝』(中国)(7)
- (七) 『賢首国師寄海東書』卷四(中国)(8)
- (八) 『維摩宗要』外、奈良時代伝来の經疏類(日本)(9)
- (四) 『無量寿經宗要』外平安・鎌倉時代に引用・参照された文献(日本)(10)

(一) 元暁の出生と前半生について

元暁は新羅眞平壬三十九年(六一七)に、新羅押梁郡南仏地村で生まれた<sup>(11)</sup>。日本では聖徳太子の晩年であり、中国では浄土教の名僧善導はかれより五歳年長である。

家系は仍皮公(又の名赤大公)を祖とし、父は薛談奈麻つまり薛氏であり幼名を誓幢と伝えている<sup>(12)</sup>。この家柄は当時にあつては恵まれた階級であつた。かれの第宅を新幢といっている点からも、元暁の父は軍職に関係していたと考えられ、かれ自身も出家前には花郎団(後出)に属し<sup>(13)</sup>、新設された「図子監」に学んだと察せられる<sup>(14)</sup>。出家後も軍職といささかかわっていたと推量される。

十五歳或は十九歳で出家したが、師僧は巷間言うごとく必ずしも恵空上人とは思われない<sup>(15)</sup>。そのことは『三国遺事』中の「二恵同塵」中の文意からすれば、恵空と元暁とは師弟関係というよりは、先後輩関係に近い間柄かと思われる。むしろ恵空の方が先輩でのちの元暁の行状の先鞭をつけていたかのである。それは恵空について「常住一小寺猖狂大酔負簫歌舞於街巷号負簫和尚」と記述があることも傍証になろう<sup>(16)</sup>。

元暁の法友のうち特筆すべき人物は義湘である。新羅眞徳女王四年(六五〇)元暁三十四歳の時、両師連れだつて入唐留学を目指したが、途中高句麗の巡邏軍にとられ失敗した<sup>(17)</sup>。文武王元年(六六一)四十五歳の時再度義湘と渡唐を計った。しかし、元暁は途中で「唯心所造」の意を悟り一人忽然と帰国した。この故事について日本の鎌倉時代に明恵は『華嚴宗祖絵伝』の中でかなり詳しく紹介し、元暁の「心の変化によって一切の諸法が生滅する」との体験を重視した。

韓国華嚴の宗祖である義湘は、入唐の成果を着実にあらわすが、元暁は「心の外に師を求めず、師に従わず」ただひたすらに釈迦牟尼の法に近づ

かんが為の釈教法疏の著作に没頭した。とくに『大乘起信論』を究め、その『論疏』は「海東疏」と呼ばれ、中国華嚴の大成者法蔵(六四三―七一二)の教学に多大の影響を与えたほどであつた。その特色は「如来蔵思想」と「仏性論」に基づく華嚴教学を独自に発展したものであつた<sup>(18)</sup>。

かれが華嚴一乗の「融通無碍」に立ち至つた基盤には、如来蔵世界により安楽浄土に至る積極的な願いがあつたからにはかならない。そして数多くの『経疏』をバイタリティーに論述してゆくが、中でも『金剛三昧経疏』は唐に逆輸出され、唐で「あたかも菩薩の著述になるものか」と高く評価された<sup>(19)</sup>。このことは当時唐から次々と舶載された新仏教に新羅の僧達が如何に対応していったか、そして新羅統一を「有縁の仏国土」として建設しようとしたか、かれらの理想主義の信念を計ることができる。

当時新羅はたび重なる内乱外圧によって「護法奉仏」精神がなによりも期待された<sup>(20)</sup>。元暁もその出生もさることながら、当時新羅の大將軍金庾信 Kim Yo-sin (五九五―六七三)に大いに信頼された様子がある。ここでは新羅建国に際して貴族階級、中でも青年貴族集団「花郎」Hoaragの心身あげての育成が急務であつた<sup>(21)</sup>。

その新羅花郎団の精神的な支えになつたのが仏教の弥勒思想であり、中でも弥勒下生思想は花郎の理想型に適合した<sup>(22)</sup>。幾多の戦乱や飢饉を通じて当然護国思想は時に強力になり、花郎制度は護国体制の自然の成りゆきであつた。したがって民衆レベルにおいてもかかる思想は逐次浸透し新しい文化としての仏教によるモラル、そしてその規律が社会秩序の基盤として成立した。新羅のリーダーズオピニオンが目指したイヴェントは国家祭典であつた。仏教による「八閼齋会」<sup>(23)</sup>などはまさにその典型であつた。国家と民衆との中立ちに宗教と社会的ドラマ―祭事が結んだ好例といえよう。

しかし元暁は単なる權威主義に走ることなく、巨視的な仏教総括主義に徹した。それを「和諍主義」という。和諍主義の諍論は (1) 常住に執着し、(2) 無常にも執着することをいましめ、涅槃の實際と、世間際の二際 (KÖTI) を違えることなく、更に衆生も仏生の不二の立脚点に在ることを求めた。そして目指すところは、人間—とりわけ民衆の生死観をより安穩あれ、と願う菩薩行 (Bodhisattva-Caryā) であった。<sup>24)</sup>

それは元暁の輝しい成果である『華嚴経疏』や『金剛三昧経論』にみられる幽棲修行の思想から生活基盤に根ざした易行念仏の行果に期待する方向をとったことでもある<sup>(25)</sup>。

元暁の思想はときによって「護国仏教」への体制づくりに参画した傾向もあった。しかし何ごとにも偏ることなく、目さきの利害を超えた理想主義的仏国土造成への努力が急務であった。

「諸平等は虚空のごとし、大悲は海の如く一味なり、衆生と仏生とは不二ならん」の偈文のように、混沌とした世間の融和を計った半生であった。釈迦牟尼の行実を尋ね、元暁は理論の偏りをさけ、やがて民衆教化の実践活動のため『菩薩行』をはじめた。山水に臨んで坐禅し、小庵にあって疏をあらわし、草堂にあって経論を講じながら、やがては街巷に出て、大瓠 Pagai をたたき歌舞をした。

その瓠を「一切無導の人、一道に生死を出ず」という『華嚴経』の一句をとって『無導瓠』とさえなづけた。それはあたかも上求菩提下化衆生の具現化であり、そして無導の菩薩道を成就する姿であった。△前篇了▽  
●論文が規定ページ数オーバーするので、後篇は次回にまわした。後篇は『元暁の民衆教化と新羅芸能の接点について』論述する。

注

(1) 『華嚴経搜玄記』巻一及び、『宋高僧伝』・巻四

(2) 『三国史記』・五十巻は、高麗仁宗二十三年(一一四五)金富軾の撰述。

新羅、百濟、高麗の紀伝体史書である。第四十六巻・薛聰伝に「薛聰字聰智抵談捺奈麻父元暁初為桑門掩該仏書。(中略)……世伝日本国真人贈新羅使薛判官詩序云嘗覽元暁居士所著金剛三昧論深恨不見其人開新羅国使薛即是居士之抱孫雖不見其祖而喜遇其孫乃作詩贈之共詩至今存焉但不知其子孫名字耳」。とあり、日本国天平宝龜十年に來日した元暁の孫薛仲業について伝えている。

(3) 『三国遺事』五巻は高麗忠烈王の時、僧一然が、寺記、寺誌、縁起文、願文、口伝、碑銘等を蒐めとくに民間伝承にも多くさき新羅時代の生活史を知る上にも貴重な文献である。また中国の『靈異記』や日本の『日本靈異記』は同系のものである。加えて同著には「海東絵伝」「高僧伝」「僧伝」「三和尚伝」「金陟明撰」「円光師伝」「釈宝瓌伝」「義藏伝」「義湘伝」「梵日・普徳・郁面本伝」「良志法師伝」等多くの散佚資料からの引用があり重要である。これには元暁の出身、生所、生年、性情行状、著述についてとりまとめているが、行状の詳細について「其遊方始末弘通茂跡具載唐伝与行状不可具載」といい深く言及していない。なお本書には典拠として『暁師行状』・『暁師本伝』の名が付されているが現存していない。なお引用文中「唐伝」については注(7)参照。

(4) 大正三年五月慶尚北道慶州郡東面暗谷里止淵の溪流中より発見された断碑で、新羅惠恭王(七六五—七七九)から宣徳王(七八〇—七八四)の間に建てられた。ここに元暁の一代記が陰刻され名実共に元暁資料の基本となった。小田幹治郎「新羅名僧元暁の碑」(朝鮮叢報大正九年四月)葛城末治「高仙寺誓幢和上塔碑」(朝鮮史金石文大正十三年)・碑文については朝鮮総督府編「朝鮮金石総覧上巻」(大正八年三月)に詳しい。

(5) 高麗肅宗六年(一一〇一)八月の詔に「元暁義湘東方之聖人也無碑記諡号厥徳不暴朕甚悼之其贈元暁大聖和静国師義相大聖円教国師有司即所住処立石紀徳以垂無窮」とあり、建碑の趣があるが現存していない。しかし『大東金石書』にはその一部分の拓影が載り、崔誦の筆と伝えている。

(6) 高麗文宗王の第四子義天法師の編としている。本論中に元暁の著述四十四

部を伝えており（一部は散佚）、これは石田茂作『奈良朝現存一切経疏目録』中の元暁著述六十余部と共に重要なものである。なお元暁の著作目録については和山博重『新羅撰述仏書書目について』（朝鮮総督府図書館文献七二号昭和十七年）に詳しい。

(7) 卷四の『唐新羅国黄竜寺元暁伝』は九八八年、宋賛寧の編述にかかわり、年代的には『新羅誓幢和尚碑』に次ぐものである。『三国遺事』よりも約三百年古くここでは、唐伝として紹介している。

(8) 唐僧法蔵が元暁の法友義湘に直接あてた書簡で『華嚴探究記』二巻とともにあった。当本は間接資料として重要である。

(9) 石田茂作『写経より見たる奈良時代仏教の研究』には注(6)でふれた如く、元暁の論述が多く写筆された。『維摩宗要』は天平七年(七三五)の書写で元暁寂後五十年足らずで日本に紹介され書写された。

(10) 平安時代の智憬の『浄土教疏』、源信『往生要集』、源隆国の『安養集』、伝良慶『安養抄』、珍海の『決定往生集』、法然の『撰撰本願念仏集』などには元暁の所説がしばしば引用されている。又法然の浄土宗宗名の典拠は元暁より伝えられ、明恵の『華嚴祖師絵詞』には、仏家の理想像として元暁・義湘をとくにとり上げていることに注目したい。日本中世仏教では、伝元暁の著『遊心安樂道』がひろまり、かれの『無碍行』の行状が、空也・一遍などの市井の遊行僧にも影響を及ぼしている。

(11) 『宋高僧伝』には「生地湘洲也」とある。『三国遺事』には「初示生于押梁郡南仏地村北栗谷婆羅樹下」とあり、懷妊の際の流星奇瑞も釈迦牟尼降誕にあわせた神格化傾向を示している。

(12) 奈麻とは新羅官位中十七階中の第十一位に当たり、これに任ぜられる為には、骨品、六頭品、つまり貴族出身でなければならない。八百板孝保『新羅社会と浄土教』（史潮七ノ四四）。

(13) 花郎については『三国史記』・卷四十一及び『同書』・卷四十七。又国子監については『同書』・卷五（善徳王）の項。

(14) 『三国遺事』卷一・太宗春秋公の条に、唐の將軍蘇定方が新羅の金庾信に贈った鸞と鶴の絵の判読を、元暁がとき明した故事は、乱世にあって軍の一助をなしていたことを推量される。

(15) 『三国遺事』に「時元暁撰諸経疏每就師質疑或相調戲」とあり、これだけ

では恵空が元暁の師であった説明は困難である。

(16) 恵空は眞平王から善徳女王代（六C後〜七C中）の僧で、多くの神異を表わした。又奇行に富み、大酔して簀を負って歌舞しながら行脚した。八百板孝保『新羅僧元暁伝攷』（大正大学学報三十八号）

(17) 『三国遺事』卷四、「義湘伝教」の項。

(18) 元暁の著述は八十六部あり、横超慧日『元暁の二障義について』（東方学報）。残っているものは二十二部ある。鎌田茂雄『朝鮮仏教史』（東京大出版）。

(19) 『宋高僧』・卷四に詳述されている。そこでは、『金剛三昧経』を新羅国王が竜宮より将来し、それを元暁が美事に論述する有様が述べられている。しかも前記、日本の『華嚴祖師絵詞』にもエピソードとして大きくとり上げていることを注目したい。

(20) 新羅眞興王十一年（五五〇）から文武王五十六年（六七六）の百二十年間に、周辺の高句麗・百済を始め、唐・日本などとあわせて六十回以上もの戦争にあげられていた。『三国史記』卷六・（文武王下教書）。『同書』卷七・（十一年薛仁貴書）。『同書』卷七・（文武王答薛仁貴書）。

(21) 新羅統一の原動力となったのは人材養成の機能を十分に發揮した花郎の制度であった。『花郎道創設に対する小考』金光永（東国思想・第一輯・韓文）。花郎 Hwar-a とは、新羅貴族中十五〜十六歳の者の中から奉戴し、建国の基礎となした。平時は道義によって自らを鍛え、歌楽や名山勝地での鍛錬、遊樂を通して修養に励んだ。戦時には青年戦士団として先頭に立ち、花郎はそれぞれ数百より千人以上の花郎徒と称する精兵を率いて戦った。六世紀初頭にはすでに部族社会の青年集会にそのしりが見られ、眞興王（五四〇〜五七六）のときに制度化される。花郎組合は多面的な機能をもち青年戦士団・歌舞組合、教育機関としてのほかに、八関会等の国家的祭事の祭儀の役目をもち、又社会秩序を持つ司法的機能さえも司った。この機能と習俗は半島の政治形態にマッチし後世にまで存続する。李朝に至っても下層階級中にも花郎の残光が伝えられてゆく。

(22) 『弥勒下生経』では兜率天より下生した弥勒菩薩が、竜華樹下において成道し、三会の説法によって衆生の済度に結ばれることを願う信仰で、下生する国土は、時世が安樂で、城邑聚落は門を閉ざすことなく、饑饉毒害は

(23)

なく、互いに恭敬和順、言語謙遜にして、瑞嚴な面持ちの人、福德が充つ人々が住む理想国土であるという。この經典では正に「八閼齋会」と弥勒下生が結びつく重要なモメントが存在する。

仏教では大乘菩薩戒と律制による、戒、八戒、十戒などがある。在家にはとくに八戒が好んで行われ、真興王代ごろより一日一夜を選んで行われた。一日の戒は不殺生、不偷盜、不虛言などで、新羅では本来の個人的戒律をはなれ護国思想と結ばれるところに特色がある。そして『持齋經』的自己精進から集团的祈禱性に変貌する、つまり鎮護国家の為に冥加が願望されてきたことは明らかである。『新羅仏教の戒律思想の研究』蔡印幻(国書刊行会)。

(24)

かれが仏教によせる態度は「融会和会」の精神、つまり前述の(和諍思想)であった。かれの数多くの論述をつらぬくものは、百家の異論を綜合し帰一させる目標があった。それは著述中の「宗要」である。『宗』とは多様化に発展する意味であり、『要』とは帰一化、集約化である。それはまさに「多に展開し、一に統合する」ことであり「開合の理」といっている。『新羅仏教の戒律思想』・蔡印幻・国書刊行会。

(25)

「開合の理」は、開けば無量無辺の義が開かれ、合すれば和諍思想へと昇華する。まさに開合によって「宗要」が明かされ、円融無碍の「和諍思想」へと昇華するという。当時中国仏教の経論が新羅に多く伝来し、「宗要」の整備がもっとも急がれた。日本では約一世紀ほどのずれで、朝鮮半島經由又は唐より同じように多様な仏教思想が伝来してくるが、奈良時代にはまだ消化しきれず、平安時代空海・最澄をまっとうやく日本仏教の論疏の展開をみた。奈良仏教・平安仏教を通じて、新羅元曉の「宗要」の教理が重きをなしていたことは言うまでもない。

# 發心修行章

芬皇寺沙門

元曉

述

海東初和達歷諸山華嚴講師元曉和尚  
慶州人也隋時終南山牛頭宗智賢師弟黃  
龍寺大聖和  
靖元曉國師

夫諸佛諸佛莊嚴寂滅宮於多劫海捨欲苦行  
衆生衆生輪迴火宅門於無量世貪欲不捨無  
防天堂少往至者三毒煩惱爲自家財無誘惡  
道多往入者四蛇五欲爲妄心寶人誰不欲歸

元曉著『發心修行章』京大本

(短大教授)